三味線のひびきに乗せて

気仙沼市立階上中学校　３年　菊田　春

皆さんは「ボサマ」という人達を知っていますか。昔，津軽で杖をつき，または家の人に杖で導かれながら，各家の軒先で三味線を弾き，米やお金をもらって生活していた盲目の男性達のことを「ボウサマ」と呼んでいたのだそうです。

母が民謡を，二人の兄が三味線をやっていた影響で，私も６歳の頃から三味線を習っていますが，ボサマや三味線の歴史について知ったのはつい最近です。

習い始めた頃は，長時間の正座が辛かったり，背が低いために棹の上まで手が届かなかったりと，大変なことも少なからずありました。でも，様々な曲を覚えられるのはとても楽しく，何より，三味線のひびきがどんどん好きになっていったため，やめたいと思ったことは一度もありませんでした。

兄が本格的に津軽三味線を始めたこともあり，発表会を聴きに行く機会も多くなって，更に三味線にひかれていきました。

そんなある日，あの大震災が起こり，私の家も流失してしまいました。たまたま帰省していた兄は，津波が来ると分かって，祖母の手を握り，もう片方の手には三味線をつかみ，必死に高台を目指したと後に知りました。津波直後は安否が不明だった家族と合流でき，安堵しつつ，不自由ながらも家族が一つ所で話をする時間がもてました。その中で兄に，「どうして三味線を持って逃げたの？」と聞きました。すると兄は「なんでかなぁ。理屈じゃないな。気が付いたら握って走っていた。」と言うのです。その後兄は，ボランティアで三味線を弾いて，避難所を回っていました。

兄をそんなにもとりこにする三味線って何だろうと考えていた時に知ったのが，ボサマです。ボロボロの三味線を抱き，石を投げつけられ，さげすまれながらも，生きるために弾き続けた人達。趣味で三味線を弾いてきた私には想像もできませんでした。各家を回って三味線を弾くことを「門付け」というそうですが，まさに過酷な状況から生まれた門付け精神は，世界に通用する芸術に高まっていきます。ある時は凍てつく地吹雪を，ある時は雪を溶かす炎を，そしてか細く透き通る風をーー三味線の様々な表情にはボサマ達の魂がこもっていたのです。

私が「なんとなく」ひかれていた三味線のひびきには，こんなにもすごい背景があったことに気付かされました。これこそが伝統文化なのだ。考えてみれば，私たちの身の回りの一つ一つ全てに歴史があり，意味があるのだ。四季を織りなす慣習にも，あいさつの仕方一つにも……。そして，この私の存在にも意味があり，何かを引き継ぐ役割を担っているのだ。

そう思うと，私は全てのものがいとおしく感じられました。毎日を漠然と生きていてはいけない。自分や他の人を大切にしよう。感謝の心を忘れないで時を刻もう……。

あの大震災から１年が過ぎた昨年の３月１１日。私は気仙沼の「復興マルシェ」という商店街の開店記念で，三味線を弾きました。私の三味線を聴いている時間だけでも，辛いことを忘れてほしいという願いを込めて。すると，その場にいた人達が手拍子をくれたのです。励ます側の私が，その手拍子によって逆に元気をもらいました。演奏が終わった後には大きな拍手と笑顔。そして，涙。私にもできることがあると思うと，心から嬉しくなりました。

私はこれからも三味線を弾き続けていきます。技術的には未熟でも，私の弦が音を奏でる度に，日々をていねいに生きていこうという思いを忘れないでいたいからです。

私も私の魂を伝えていきます。三味線のひびきに乗せて。